

東北大学百周年を迎えるに当たり 学生歌制定に関わる資料を整理してみたものです。
現在東北大学の学生歌として定められているのは 次の6曲です。

1. 青葉もゆるこのみちのく (昭和28年制定一位)

法学部 野田秀作詞、工学部(二教) 阿座上竹四作曲、福井文彦編曲

2. 陸奥の青葉の都 (昭和28年制定二位)

法学部(一教) 田中喜勝作詞、文学部 戸田靖男作曲、福井文彦編曲

3. 緑萌えたつ高き山脈 (昭和28年制定三位)

文学部(一教) 染谷昇作詞、理学部(一教) 目黒保行作曲、福井文彦編曲

4. 若さはからだに (昭和30年制定)

法学部 鈴木勲作詞、経済学部大学院 早坂啓造作曲、福井文彦補修編曲

5. 歌に歌を (昭和32年制定)

文学部 中鉢敦子作詞、教育学部 小笠原嶺子作曲、福井文彦補修編曲

6. みどりなす平和の学園 (昭和35年制定)

工学部 住山一真 教育学部 皆川秀雄作詞、福井文彦作曲

これらの歌は学生部が作詞募集 作曲募集を行い 学友会学生歌選定委員会を経て発表・制定されました。

現在では、「青葉もゆる…」を除くとあまり歌われていないのではないのでしょうか。「陸奥の青葉の都」は応援団で歌われていると聞き及んでいますが 確認はしておりません。現在学友会合唱部では 男声合唱団が「青葉もゆる…」を 混声合唱団が「緑なす平和の学園」をそれぞれ演奏会開演時に演奏しております。また 現在廃部となっている女声合唱団が存在した時代は 同じく開演時に「歌に歌を」を演奏しておりました。

昭和28年6月 旧東北帝大に種々の学校が併合されて総合スタート後の新生東北大学は キャンパスも市内各所に分散しており そのためか全学としてのまとまりが少なく 学生の結合も他の大学に比べて乏しい状況にありました。たまたま 学生部の次長に着任していた文部省事務官の方が 東北大学にそうした歌がないなら創ろうではないか と積極的に予算措置を講じてくださり 制定しようと言うことになったとのことです。そこで全学生の統一を図るために学生連帯のシンボルとして学生歌の制定が提唱され 学生部から歌詞募集が行われ多数の応募作品の中から3篇が入選作として発表され 引き続き作曲募集が行われました。46曲の応募があり選定委員会が入選作3曲を選定。教育学部教員養成課程の主任担当教官である福井文彦先生(当時講師)が補修編曲を行い 10月31日午後1時より本部中央講堂に職員・学生約559名が参集して 昭和28年度東北大学学生歌入選作品発表会並びに一位選定会が開催されました。講堂では渋谷伝先生(当時講師)の独唱後 福井先生の指導で入選歌3曲の歌唱指導が行われ参加者全員で歌い 一位選定投票が実施されました。投票結果「青葉もゆる…」が289票を集めて一位 「陸奥の…」が140票で二位 「緑萌えたつ…」が122票で三位と決定されました。

当時の東北大学新聞の論説（学生歌決定に際して）の一節に “ひとり学生に限らず 心ある農漁民労働者 サラリーマンなども皆新しい歌 心から皆が歌える歌を待っているのではないだろうか。学生もデモやコンパの時にばかり歌を歌うのではなくして家に居る時や散歩したり学校のグラウンドに寝転んでいる時などにも 誰もがいつでも歌える歌を待っているのである。我々が本当に明るく心の底から歌える歌が出来たなら どんなにか喜ばしいことであろうか。…（中略）… 今度 本学の学生歌の決定に際して全学学生がひとしく東北大学学生歌を待っている。それは我々東北大を代表する歌である。以前の東北大に三つの教養部が作られて旧二高の寮歌と逍遙歌が少数の学生によって守られてきているが 新学制になって始めて全学統一した学生歌が出来ることは本当に我々の心を充たしてくれるようだ。我々はこの学生歌を高らかに歌おうではないか。十月の澄みきった秋空の下で色々な会合 対外試合の時ばかりでなく学園内外を問わず この学生歌を我々若人の胸の中で新しい空気と一緒に歌いだそうではないか。… “ と期待に満ち溢れた文章があり 当時の熱い高揚した雰囲気は何えます。

これらの3曲は「青葉もゆる…」及び「緑萌えたつ…」が‘Tempo di Marcia’の「陸奥の…」が‘爽快に’の指定がついたメロディで 新生の意気にもえる軽快なリズム感のある曲になっています。

一位の阿座上さん(東北大学名誉教授 教養部時代の一時男声合唱団の団員でした)のお書きになった青葉工業会会報の文(「青葉もゆるこの50年」)によれば “ボイラーを焚きながら五線紙に向かうこと3日程、一番気に入った歌詞に鼻歌でつけた一曲”とのことで ハ長調で作曲されていた曲を福井先生が補修し 歌い易い音域に移調して歌うテンポを定め 伴奏譜が付けられました。作詞の野田さんは 東京の多摩市で牧師として現在もご活躍されています。作詞については (戦後の急激な価値観転換の中で) “自分が生きていくということのために ものをどのように考えたらいいか分からない状態で数年いました。そういう中から 歌詞の中にそういうことが表れているのかも知れませんが あらためて 平和とか命とか真理とか自由とか何かそういうものに対する思いというものがあつただろうと思います。 もっと現実的に言うと 貧しい学生にとっては賞金五千円というのも魅力であつたということもあります。”と述べておられます。因みに当時男声合唱団の指揮者である戸田氏の指揮による学生歌レコードが大学の手で製作されています。録音は当時のNHK 仙台局のスタジオで行われ 夜遅くまでかかったそうです。当時合唱部の中核である男声合唱団演奏用に [男声四部合唱]譜が福井先生により編曲作成されています。この編曲はラララのリズムを合いの手に用いて より一層のリズム感が強調されています。但しこの歌い方は昭和40年代末ごろから失われ 軽快さよりは荘重さが前面にでるようになってしまっています。(これについては記念誌「心に翼を」P44の記述を参照ください)

昭和30年の学生歌制定に関しては 前後の経緯から判断しますと 学生部で一年おきに学生歌を募集・制定する考え方があつたようで これに沿って制定されたものと思われます。当初の作詞募集では “前回より水準が落ちており感覚が古い 例えば昔の寮歌風のものも多くむづかしい言葉を使ったり 仙台近郊の観光地を引き合いにだしたりしている”として該当作品がなく 9月末締め切りで再募集が行われました。その際選定委員会から “歌唱に適する歌詞であることはもちろん国語的に平易なもので 現代の学生生活をもつたもの 一節が6行前後 特に

新しい感覚を盛り込んでもらいたい”との注文がつけられました。曲の募集は10月10日から31日で行われ、11月19日に発表会が行われました。発表会用のメロディ譜と共に「東北大学男声合唱団に捧ぐ」と献呈の辞がついた福井先生編曲の男声四部合唱用の楽譜には、昭和30年11月19日の日付けが入っており、「明朗に誇りを持って」のテンポ指示が記されています。

昭和32年の学生歌募集に際しては“今までの学生歌があまり東北大生の親しみ少なく、また創立50周年と言うことにかんがみて”募集する旨が述べられております。結果的にこの時は54篇の応募作品に選定委員会の意に沿う入選作詞がなく、その中で6篇やや異色な作品の作詞者を集めて改作を依頼し、その中で一番優れた中鉢さんの作品に選定委員会が加筆補訂をし、準入選となった「歌に歌を」の詞が発表されて作曲募集が行われ、59篇の応募作品がありました。昭和33年2月1日仙台市公会堂において、東北大学創立五十周年記念大学祭行事の一環として、昭和32年度学生歌発表並びに音楽部卒業生の送別演奏会が700名参加の下行われ、選定経過報告と入選者8名の表彰がありました。「歌に歌を」に関しては、準入選の作詞・入選曲作曲のいずれも女性ということで花を添えたとの報告があり盛大な拍手を浴びたことが報じられています。学生歌の発表は、独唱、女声3部合唱、男声4部合唱、混声4部合唱、管弦楽演奏、学生歌歌唱指導と盛り沢山でした。男声・女声両合唱団による混声とオーケストラの合同演奏は、活発明朗なものと好評でした。

最後の学生歌である「みどりなす平和の学園」に関しては、昭和34年11月に新たな学生歌の作詞募集が締め切れ、42篇の応募の中から工学部4年住山一貞さんと教育学部3年皆川秀雄さんの共作「ゆたかなみちのく」の作詞が選ばれ、引き続き作曲募集が行われました。しかしながら35年1月締め切りの応募作品7作品に入選作無く、再募集による19作品にも良作見当たらず、結局福井先生が作曲して、題名を原詞のリフレイン句である「みどりなす平和の学園」と改めて、昭和35年4月27日に川内分校で、黒川学長臨席の下昭和34年度東北大学学生歌発表会が行われました。これ以降新規の学生歌募集は行われておりません。

昭和32年の50周年式典においては「参加者一同により声たからかに「青葉もゆる…」が歌われた」との記事が見受けられますので、この頃から東北大学学生歌の代表としての地歩を固めて広く受け入れられるようになったと考えられます。

今回創立百周年を契機に「青葉もゆる…」を大学公式の学生歌として認定するとの意向が出されております。上記の学生歌はいずれも、学友会学生歌選定委員会により制定され、発表時にそれぞれの時点での学長が臨席・表彰しており、その意味でどの曲も学生歌として公認された楽曲であります。しかし「青葉もゆる…」が一般学生・教職員のみならず広く世間にもなじみの深い、本学学生歌の代表曲としての榮譽を得たものと受け止めたいと思っております。

取りまとめにご協力を頂いた方々に深い感謝の意を表し、「愛もて求むる真理……我等こそ国の礎」は東北大学の理想の姿を映して余すところがない」との阿座上さんの一文を、本稿の結びとしたい。

(東北大教養部新聞・東北大学新聞・河北新報の記事 阿座上竹四・野田秀・及川洪・仁科博之・戸田靖男・新田昭夫・波多野康男の諸氏の資料提供並びにご協力を得て作成しました。)